Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-26

19世紀初頭のロシアによるジョージア併合 : 黒海進出目的説の再検討

メスヒシュヴィリ, ジャバ

(Citation)
海港都市研究,12:24-42

(Issue Date)
2017-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010088

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010088

19 世紀初頭のロシアによるジョージア併合

―黒海進出目的説の再検討―

メスヒシュヴィリ・ジャバ
（MESKHISHVILI, Jaba）

I.　はじめに

本稿は、日本ではあまり知られていない 19 世紀初頭のロシアによるジョージア併合について、ジョージアでの先行研究をもとに紹介しながら、論点や問題点を整理し、その目的がロシアによる黒海進出、すなわち海港都市の占領にあったという指摘を検証しようとするノートである。

1801 年、ロシア皇帝アレクサンドル 1 世のマニフェスト（宣言書）により、東ジョージアにあるカルトル・カヘティ王国がロシアに併合され、残りの地域もその後順次併合された。現在のジョージアでは、この年が正式にロシアに併合された年とされている。マニフェストでは、ジョージア人は自らの手で敵から自国を守ることができないので、ロシアが保護するために併合したとされる[1]（なお、本稿では法的にジョージアがロシアの支配下に置かれたことを「併合」と言うが、史料、先行研究の理解に基づく場合は「征服」の語を用いた）。

ジョージア・ロシア関係に関する研究は少なくないが、未だ十分ではない。その原因は、ジョージアがロシアによる併合（1801～1917 年）とソ連による併合（1921～1991 年）を受けていたことによる。ロシアは、ジョージアの併合は敵国から保護するためのものであり、併合しなければ、ジョージアは敵国によって滅ぼされたであろうと、自国による併合の正当性を主張した。1991 年までのソ連時代も、研究には政府の検閲が入っており、誤りが多い。ソ連時代には、ツァーの政策への批判は許されたが、ロシアによるジョージア併合については、肯定的に書かなければならないとされていた。そのため、ソ連の崩壊（1991 年）から現代までのジョージア人の研究者は、このよう

[1] ,,ქართული სამართლის ძეგლები’’，ტომი 2，მეცნიერება，თბილისი 1965，pp. 554-555
『ジョージア法律全集』第 2 巻（メツニエレバ出版社、1965 年）

なソ連のプロパガンダによって書かれた研究を批判し、1801年の併合の不当性、ロシアの侵略政策を明らかにすることに努めてきた。そこで本稿では、ソ連崩壊＝ジョージア独立後に検閲を受けずに書かれた研究をまず検討しておく。

主な研究には、以下のようなものがある。

第1は、ヴァフタング・グルリ「1483～1921年のジョージア・ロシア関係」（ウニヴェルサリ出版社、トビリシ、2011年）[2]である。グルリ氏はこの研究において、1801年から1810年にかけて、ロシアがジョージアを併合した経緯をはじめて論じた。その根拠としてグルリ氏が注目しているのは、ロシアによる従来のジョージア・ロシア間の条約（「ギオルギエフスク条約」1783年、「エルアズナウリ協定」1804年）の侵害である。しかし氏は、意外にもロシアの併合目的については殆ど述べてない。

第2は、ジバシュヴィリ・オレグ『1768～1774年の露土戦争と南ジョージア』（ショタ・ルスタヴェリ国立大学出版社、2010年）[3]である。ジバシュヴィリ氏は、ロシアのジョージアに対する侵略政策を検討し、ロシアが全コーカサスの「征服」を狙っていたとしたが、ここでも肝心のロシアの「征服」の目的については述べられていない。

ソ連時代のロシアの歴史家の研究によると、ロシアがジョージアを併合した目的は、イスラム教の敵国から保護するためだったと考えられている。ソ連が崩壊した後で独立時代のジョージアの研究者らは、ロシア・ソ連のプロパガンダの下で書かれた研究を批判し、ロシアがなぜジョージアを併合したのかを実証的に明らかにしようとしてきた。しかし、いまだその点の評価は曖昧である。本稿は先行研究を踏まえながら論点や問題点を整理し、ジョージア併合の目的がロシアによる黒海進出、すなわち海港都市の占領にあったという指摘を検証してみたい。

---

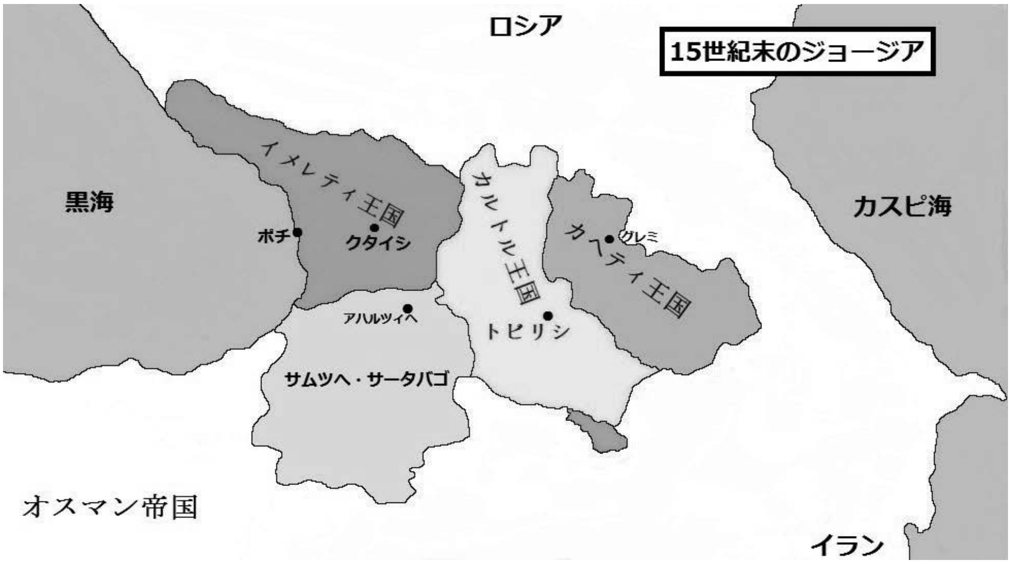
[2] ვახტანგ გურული ,,საქართველო რუსეთის ურთიერთობა 1483-1921’’, უნივერსალი, თბილისი 2011. グルリ・ヴァフタング『1483年～1921年にジョージア・ロシア関係』（ウニヴェルサリ出版社、2011年）

[3] ოლეგ ჯიბაშვილი ,,რუსეთ-ოსმალეთის 1768-1774 წლების ომი და სამხრეთ საქართველო’’, შოთა რუსთაველის სახელმწიფო უნივერსიტეტი, ბათუმი, 2010. ジバシュヴィリ・オレグ『1768～1774年の露土戦争と南ジョージア』（ショタ・ルスタヴェリ国立大学、2010年）

II.　15 世紀末から 18 世紀初頭までのジョージア・ロシア関係

まず､先行研究に依拠しながら､ロシアによる併合前のジョージアとロシアとの関係を、時代をさかのぼって略述しておきたい。

1453 年、オスマン帝国によってコンスタンティノポリスが陥落したことで、ジョージアはキリスト教のヨーロッパ世界（キリシタン・ヨーロッパ）から切り離された[4]。4 世紀以降のキリスト教国にとって、ヨーロッパ文明との関係は重要であった。その結果、ジョージアは、オスマン帝国とイランからの圧迫に対し、自国の文化・宗教・政権を守るためにしばしば戦わなければならなかった。1460 年代末からジョージア王国の崩壊が始まり、1490 年に崩壊した。ジョージア王国は、イメレティ王国、カヘティ王国、カルトル王国[5]、サムツヘ・サータバゴ（厳密には王国ではない）の 4 カ国に分かれた（ロシア革命後、この 4 カ国を含む地域がジョージアとして独立したため、本稿ではこの地域をジョージアと総称し、またその住民をジョージア人と表記する場合もある）。また、対外戦争だけでなく内戦も起こり、国防はさらに難しくなっていた。



（注：イメレティ王国にサメグレロ公国、アブハジア公国、グリア公国やスヴァネティ公国が入った）

[4] ბატიაშვილი ელბერდი ,,ამონაკრები ძველი, ახალი და უახლესი ,,ქართლის ცხოვრებიდან’’’’, თბილისი, 2015, p.43 バティアシュヴィリ・エルベルディ『カロトル・ツホヴレバの新旧解釈』（2015 年）

[5]後にカヘティ王国とカルトル王国が合併し、カルトル・カヘティ王国となった。

1555 年、イランとオスマン帝国の間で「アマスイヤ和平条約」が締結された。この条約により、ジョージアは東西に分断され、東ジョージアはイラン、西ジョージアはオスマン帝国の勢力圏に置かれた。さらに、北側にはイスラム教国のコーカサスがあった[6]。つまり、キリスト教のジョージアは完全にイスラム教の国々に囲まれ、キリスト教のヨーロッパ世界から切り離されて孤立してしまったのである。その後ジョージアは長い戦いによって人口は減少し、各国は孤立無援の戦いで国力を低下させた。

イスラム教の国々の包囲を突破するためには、強大なキリスト教国との同盟が必要であった。そのような国として選ばれたのがロシアであった。ロシアは、1480 年にモンゴルから独立し、更に勢力圏を拡大しようと[7]、コーカサスに接近した。敵対する国や国家宗教を同じくするロシア（ロシアはジョージアと同じ正教国であった。正教とはキリスト教の教派のこと）に対して、ジョージアには期待感があった。ジョージア人にとってキリスト教は他国と関係を結ぶ上で非常に重要なものであった。そこで、ジョージアの王国らはロシアに対して数回、にイランまたはオスマン帝国に対抗するための支援を請うたが、実現には至らなかった。（表参照）

表　ジョージアの国王らからロシアへ支援要請（年表）

年	国王の名称	ロシアの国王の名称	結果
1483 年	カヘティ王国のアレクサンドル１世	イヴァン 3 世	拒否[8]
1563 年	カヘティ王国のレヴァン１世	イヴァン 4 世	協力要請を受け入れ、カヘティ王国に 500 人の軍隊を派遣した。しかし、クリミア・ハン国がロシアを攻撃したため、カヘティ王国は北コーカサスからの撤兵を余儀なくされた[9]。

6 ვახტანგ გურული ,,საქართველო რუსეთის ურთიერთობა 1483-1921'' , უნივერსალი、前掲、pp. 6-7

7 ვახტანგ გურული ,,საქართველო და რუსეთი (მფარველობიდან ანექსიამდე), უნივერსალი, თბილისი, 2010, p. 29 グルリ・ヴァフタング『ジョージアとロシア：保護から併合へ』（ウニヴェルサリ出版社、2010 年）

8 ვახტანგ გურული ,,საქართველო და რუსეთი (მფარველობიდან ანექსიამდე)、前掲、p. 31

9 ვახტანგ გურული ,,საქართველო და რუსეთი (მფარველობიდან ანექსიამდე)、前掲、p. 31

1586年	カヘティ王国のアレクサンドル2世	フォードル1世	軍事的な援助を約束したものの、実現には至らなかった[10]。
1588年	カヘティ王国のアレクサンドル2世	フォードル1世	軍事的な援助を約束したものの、実現には至らなかった[11]。
1649年	イメレティ王国のアレクサンドル3世	アレクセイ	拒否[12]
1658年	カルトル・カヘティ王国のテイムラズ1世	アレクセイ	拒否[13]
1682年	イメレティ王国のアルチル2世	イヴァン5世	拒否[14]

ではこの時期、ロシアはどのような外交政策を取っていたのか。17世紀末からロシア皇帝ピョートル1世は、ロシアをヨーロッパ列強の一員とすることを目指していた。彼の目標は、黒海、ボスポラス海峡、ダーダヌルス海峡をロシアの影響下に置くことであった。またカスピ海をロシアのものとし、ヨーロッパからインドへの航路をロシアの管理下に置くことも狙っていた。その目的を達成するため、ピョートル1世はコーカサスに進出するべく、1720年、カルトル王国に使者を派遣した。ピョートル1世は、使者を通じて国王ヴァフタング6世に対し、キリスト教徒をイスラム教の敵から保護するためにコーカサスに進出したのだと説明する。更に、その戦争にジョージア人も協力し、他のキリスト教徒と共に対イラン同盟を結ぶことを提案した。ヴァフタング6世はこの提案を受け入れ、ロシアの同盟国となった。

グルリ氏によると、「国王ヴァフタング6世は、ロシアと同盟を結ぶ前に、イランからの保護と支援を求めるために、西ヨーロッパに使節団を派遣した。しかし、当時のイランはオスマン帝国の同盟国として認められており、1715年、支援を拒否された。ヴァフタング

---

[10] ვახტანგ გურული , , საქართველო რუსეთის ურთიერთობა 1483-1921’ ’ 、前掲、pp. 14-16
[11] ვახტანგ გურული , , საქართველო რუსეთის ურთიერთობა 1483-1921’ ’ 、前掲、pp. 14-16
[12] დოდო ჭუმბურიძე, ვაჟა კიკნაძე, ხათუნა ქოქრაშვილი, ლელა სარალიძე , , საქართველო-რუსეთის ურთიერთობები XVIII-XXI საუკუნეებში (სამეცნიერო ლიტერატურის და დოკუმენტების მიხედვით), წიგნი I, მერიდიანი, თბილისი. 2016, p. 196 チュンブリゼ・ドド、キクナゼ・ヴァジャ、コクラシュヴィリ・ハツナ、サラリゼ・レラ『18世紀～21世紀にジョージア・ロシア関係、第一巻』(メリディアニ出版社、2016年)
[13] ვახტანგ გურული , , საქართველო რუსეთის ურთიერთობა 1483-1921’ ’ 、前掲、pp. 19-20
[14] დოდო ჭუმბურიძე, ვაჟა კიკნაძე, ხათუნა ქოქრაშვილი, ლელა სარალიძე、前掲、p. 197

6 世は自国を守るために、ロシアとの同盟を余儀なくされることになった」[15]のであった。

1722 年、ピョートル 1 世はカスピ海沿岸に進出を開始し、ヴァフタング 6 世は連合国の一員として 4 万人の軍勢（アルメニア人等を含む）を従え、待ちかまえた。当時、イランの国力は低下しており、ロシア・カルトル王国連合軍に対抗することは困難であった。他方オスマン帝国は、コーカサスに「強いロシア」ではなく「弱いイラン」がいる方が都合がよいので、イランを救済するためヴァフタング 6 世に同盟を提案した。しかし、ヴァフタング 6 世はピョートル 1 世からの支援を期待していたため、オスマン帝国からの提案を拒否した。

ところが 1722 年、ピョートル 1 世はカスピ海沿岸への遠征を突然中止した。カルトル王国は、同盟国ロシアから援助を得られず、イランやオスマン帝国に対峙して孤立した。まずイランの支持で北コーカサスの諸民族がカルトル王国を攻め入り、更に 1723 年、オスマン帝国軍がカルトル王国の首都トビリシを陥落させ、カルトルは焼け野原にされた。

1724 年、ロシアは秘かにオスマン帝国と「コンスタンティノポリス和平条約」を結び、東ジョージアはオスマン帝国の勢力圏として認められることになった。ロシアは、キリスト教徒をイスラム教の敵から保護するという、国王ヴァフタング 6 世への約束を守らなかったため、ヴァフタング 6 世は、1724 年に戦争を中断しロシアに逃亡することを余儀なくされた[16]。この事実は、ジョージア人にとってのキリスト教の重要性を示唆していると私は理解している。ヴァフタング 6 世は 4 万人の軍人を率いながら、ロシアの到着を待ち、共に攻撃することを期待した。また、自国の安泰のためにはオスマン帝国と同盟を結ぶ道もあったがあえてそれを拒否し、キリスト教であるロシアとの同盟を選んだ。そして「コンスタンティノポリス和平条約」の後、ヴァフタング 6 世が逃げ込んだ先は、同じキリスト教国である当のロシアであった。

1724 年、イメレティ王国の国王アレクサンドル 5 世は、オスマン帝国からの侵略を防ぐために、ピョートル 1 世に手紙を送った。国王はイメレティ王国が窮乏していることを伝え、ロシアからの経済的な支援を求めた。しかし、1724 年に「コンスタンティノポリス和平条約」を結んだロシアは、イメレティ王国だけでなく、カヘティ王国もオスマン帝国の勢力圏と認めていたため、支援を拒んだ。1738 年、アレクサンドル 5 世はロシアに再び支援を請うため使節団を派遣したが、これも失敗した[17]。

---

[15]ვახტანგ გურული , , საქართველო რუსეთის ურთიერთობა 1483-1921’ ’ 、前掲、pp. 22-23
[16]ვახტანგ გურული , , საქართველო რუსეთის ურთიერთობა 1483-1921’ ’ 、前掲、pp. 26-28
[17]დოდო ჭუმბურიძე, ვაჟა კიკნაძე, ხათუნა ქოქრაშვილი, ლელა სარალიძე、前掲、p. 197

こうして 1732 から 1736 年にかけて、ロシアはカスピ海沿岸から撤兵していった[18]。

以上のように、ジョージアの各国王らは、宗教を同じくするロシアから支援を受けることを非常に強く期待しており、何度もそのための申し入れを行っている。ロシアと同盟して敵国と戦うこと、さらには全ての主権をロシアへ譲ることさえ提案した。これに対してロシアは、その要請を表向きは受け入れることもあったものの、実際にはほとんど支援を行わなかった。ロシア（帝国）には、同じ宗教であってもジョージアを保護したり支援したりする明確な意思がなかったのである。ロシア（帝国）にとってジョージアの意義は、この時期あまり高くなかったのである。

III. ロシアによるジョージア併合の準備

1760 年代に入ると、ロシアは外交政策を改め、ジョージアに対する関心を再び強めた。この 18 世紀後半は、ジョージア併合の準備期間と言われている。本章では、なぜジョージアがロシアにとって重要となったのかを検討したい。

ソ連時代の歴史家ミハイル・ポクロフスキーによると、ロシア経済の発展は貿易を促進し、海洋への進出を促した。しかしロシアにとって、海外から技術や機械等を輸入し、また雑穀を輸出するためには、バルト海は遠かった。そこでロシアは黒海に進出し、クリミアと現在のオデッサ周辺を獲得し、地中海に入るための海峡を支配下に置くことを狙ったのである[19]。

こうしてロシアの皇帝エカチェリーナ 2 世は、黒海を目指した。黒海を目指すにあたっては、オスマン帝国の存在が妨げとなる。そこで 1768 年、露土戦争が開始された。ロシアは開戦の理由として、キリスト教民族をオスマン帝国の支配下から解放することを挙げていたが、ロシア側の本当の目的はクリミア・ハン国や北黒海沿岸を占領することであった[20]。黒海の東沿岸のキリスト教国家はジョージアだけであり、そこでロシアにとってジョージアが重要となったのである。ロシアは、オスマン帝国との戦争に、ジョージア諸国の軍も参戦させたいと考えていた。カルトル・カヘティ王国と違って、イメレティ王国は参戦に

---

[18]ოლეგ ჯიბაშვილი、前掲、p. 22

[19]მ. ნ. პოკროვსკი ,,რუსეთის ისტორია’’ სახელმწიფო გამომცემლობა, ტფილისი, 1932, p. 88 ミハイル・ポクロフスキー『ロシア史』（国立出版所、1932 年）

[20]ვახტანგ გურული ,,საქართველო რუსეთის ურთიერთობა 1483-1921’’、前掲、p. 40

向けて説得しやすいとロシア政府は考えた[21]。この考えは正しかったと言える。イメレティ王国の国王ソロモン 1 世は、オスマン帝国からの独立を求め、1764 年ロシアに対してオスマン帝国と戦うための支援を要請していたのである（この時は拒否された）[22]。

1768 年に露土戦争が始まると、ロシアはジョージア諸国に参戦を求めた。ソロモン 1 世やカルトル・カヘティ王国の国王エレクレ 2 世は、参戦する代わりに、①経済援助を行うこと、②必要な場合砲兵や大砲を送ること、③和平条約にジョージアの意思を反映すること、の 3 つの条件を提示した[23]。ソロモン 1 世やエレクレ 2 世は、オスマン帝国に併合されたジョージアの領土を取り戻すために、強力な同盟国を求めており、ロシアの申し入れはそれに見合うものであった[24]。こうして各国は、最終的に、5000 人の軍人と大砲の提供を受けることを条件に、参戦することに同意したのである。

ジバシュヴィリ氏は、ジョージアにロシア軍を派遣した目的は、①オスマン帝国に対してジョージアの軍を利用すること、②カルトル・カヘティ王国を「征服」することであったと述べている[25]。またグルリ氏によると、「エカチェリーナ 2 世はジョージアとオスマン帝国とを戦わせる南コーカサスの開戦によって、オスマン軍をコーカサスに足止めし、クリミアに全軍を送れないようにしようとした」という[26]。しかし、この意見は正確ではないと考えている。なぜなら、開戦した後でも、オスマン帝国はコーカサスに軍を増派しなかったからである。すなわち、エカチェリーナ 2 世の目的は、ジョージア人の参戦によって、クリミアに派遣されるオスマン軍の数を減少させることではなかった。

それでは、ロシアにはコーカサスに別の目的があったのか。

1770 年、ジョージアにゴットロープ・トートレーベン将軍が入った。エレクレ 2 世は、コーカサスに対するオスマン帝国の侵略拠点であったアハルツィヘ要塞への攻撃を求めたのに対して、トートレーベンはイメレティ王国に移動し、オスマン帝国軍と戦っているソロモン 1 世を支援した。イメレティ王国首都のクタイシ要塞はオスマン帝国軍の支配下にあったが、イメレティ王国・ロシア連合軍の攻撃により、要塞は陥落した。ところが、イメレティ王国への支援はそこまでであり、1770 年 10 月 4 日、ソロモン 1 世の反対にも関

---

[21] ოლეგ ჯიბაშვილი、前掲、pp. 26-27

[22] ვახტანგ ფერაძე, ლევან მუმლაძე ,,რუსეთ-საქართველოს ურთიერთობების ისტორიის ნარკვევები (X-XXIსს), ბონა კაუზა, თბილისი, 2008, p. 72 フェラゼ・ヴァフタング、ムムラゼ・レヴァン『ロシア・ジョージア関係史（10～21 世紀)』(ボナ・カウジャ出版社、2008 年)

[23] ვახტანგ ფერაძე, ლევან მუმლაძე、前掲、pp. 73-74

[24] ოლეგ ჯიბაშვილი、前掲、pp. 36-37

[25] ოლეგ ჯიბაშვილი、前掲、p. 34

[26] ვახტანგ გურული ,,საქართველო რუსეთის ურთიერთობა 1483-1921’’、前掲、p. 37

わらず、ロシア軍は黒海沿岸の海港都市ポチを包囲した。オスマン帝国軍は要塞を守り抜き、1771年2月6日、失敗したトートレーベン将軍は包囲を解く[27]。この間、彼がカルトル・カヘティ国王やイメレティ国王に対するクーデターを計画した（失敗）こともあり、エレクレ2世やソロモン1世の抗議によって、ロシアはトートレーベン将軍を更迭し、代わりにスホーティン将軍を差し向けた。

1771年に、スホーティン将軍はジョージアに入った。1771年1月13日、エカチェリーナ2世はスホーティン将軍に手紙を送った。そこに書かれていたのは、黒海への進出を実現するためにもポチは重要であるので、必ずポチを獲得し守り抜くこと、そして「神からこれより良い港がいただくまで軍艦のためにポチ港を利用する」ことであった[28]。

エレクレ2世は、スホーティン将軍にもアハルツィヘ要塞を攻撃することを求めたが、将軍は拒否し、ポチを包囲するためにイメレティ王国に移動した。国王ソロモン1世は、沼で囲まれたポチを夏に包囲することに反対した（伝染病を警戒したため）が、スホーティン将軍はポチ要塞を包囲した。しかし、彼をはじめロシア軍の半分以上は病気になり、10月には包囲を解かざるを得ない状況に追い込まれた。やむなく同年12月、エカチェリーナ2世はロシア軍にジョージアからの撤兵を命令し[29]、1772年ロシア軍は帰国していった。カルトル・カヘティ王国やイメレティ王国は、またもや同盟国のロシアは約束を守らず、オスマン帝国軍に対して孤立状態となった[30]。こうして1774年、「キュチュク・カイナルジ条約」が締結され、ロシアはイメレティ王国がオスマン帝国の勢力圏であると認めたのである[31]。

私はここにロシアの目的が明らかに示されていると考える。先行研究では明確に論じられていないが、ロシアの目的は、同じキリスト教のジョージア人をオスマン帝国軍から保護することではなく、ジョージアから黒海に進出することであった。ジバシュヴィリ氏は、ロシアでポチの獲得が決定されたのは、1771年であったという。しかし、ポチの攻撃は1771年ではなくそれ以前に、例えば露土戦争が始まった1768年に定められたと考える方が自然である。なぜならば、1770年にトートレーベン将軍はアハルツィヘ要塞への攻撃を行わず、

[27] ვახტანგ ფერაძე, ლევან მუმლაძე、前掲、pp. 78-79
[28] ოლეგ ჯიბაშვილი、前掲、p. 125
[29] ოთარ ჯანელიძე ,,ნარკვევები საქართველო რუსეთის ურთიერთობის ისტორიიდან'', საარი, თბილისი, 2013, p. 47 ジャネリゼ・オタル『ジョージア・ロシア関係史の研究』（サーリ出版社、2013年）
[30] დოდო ჭუმბურიძე, ვაჟა კიკნაძე, ხათუნა ქოქრაშვილი, ლელა სარალიძე、前掲、p. 177
[31] მერაბ ვაჩნაძე, ვახტანგ გურული, ,,ამასიიდან ყარსამდე'' თბილისი, არტანუჯი, 2007, pp. 45-47 メラブ・ヴァチュナゼ、ヴァフタング・グルリ『アマスイヤからカルスまで』（アルタヌジ出版社、2007年）

ただちにポチの包囲へと向かったからである。但し、ロシアはこの時期、ジョージアの黒海沿岸を必ずしも占領する意図はなかったと考えられる。そのような意図があったなら、実際に派遣された軍勢よりもはるかに大規模な軍勢で攻撃したであろう。実際には、トートレーベン将軍は、ポチを獲得するという目的が達成できなくなると、ただちにジョージアから撤兵した。この時はまだ、知られているように、クリミア半島獲得がロシアの第一目的であった。

エレクレ2世は、イスラム教の敵国に対して、同盟国を持たずに自国の軍だけでは国を守れないと考え、ヨーロッパのキリスト教国家との同盟を画策した。国王はイタリアの宣教師を通して、オーストリア、フランス、ヴェネツィア、ローマ法王等に経済援助や軍事改革の支援を請うた。その見返りに、ヨーロッパ諸国がオスマン帝国と戦争する場合には、エレクレ2世はヨーロッパ側で参戦することを誓った。これに対してヨーロッパ諸国からの返答はなかったが、他方でエレクレ2世はロシアにも支援を依頼し続けた[32]。

1780年からエカチェリーナ2世はオーストリアと共に、オスマン帝国をヨーロッパから排除する「ギリシア計画」を立案した[33]。1781年、エカチェリーナ2世はオーストリア皇帝ヨーゼフ2世と秘かに会い、ギリシア計画に関して交渉を始めた。ロシアの目的は地中海に入る海峡を獲得し、アドリア海からカスピ海にかけてロシアの勢力圏を拡大することであった[34]。これと当時に、エカチェリーナ2世はカルトル・カヘティ王国に向かい、ロシアの保護下に入ることを提案した。エレクレ2世はヨーロッパ諸国から支援を受けられる見込みがなかったので、自国を守るためにこの提案に応じることにした。

1783年7月、ロシアとカルトル・カヘティ王国は、ギオルギエフスクで条約(「ギオルギエフスク条約」)に調印した。「ギオルギエフスク条約」の内容は、要約すると以下の通りである。第1に、カルトル・カヘティ王国は外交権をロシアに譲り、その代わりロシアの保護領となって、敵から攻撃された場合、ロシア側は王国を保護する義務を負う。第2に、より重要な点は、この段階ではロシアがカルトル・カヘティ王国の内政に干渉する権利を持たなかったことである[35]。しかしロシアは「ギオルギエフスク条約」を遵守しなかった。これには、当時「ギリシア計画」の実行が困難となったことも関係していると私は

---

[32] დოდო ჭუმბურიძე, ვაჟა კიკნაძე, ხათუნა ქოქრაშვილი, ლელა სარალიძე、前掲、pp. 209-210

[33] ვახტანგ ფერაძე, ლევან მუმლაძე、前掲、pp. 91-92

[34] დოდო ჭუმბურიძე, ვაჟა კიკნაძე, ხათუნა ქოქრაშვილი, ლელა სარალიძე、前掲、pp. 213-218

[35] ,,ქართული სამართლის ძეგლები’’、前掲、pp. 457-482

考えている。

1783年の11月、ロシアはカルトル・カヘティ王国側が求めていた2連隊ではなく、2大隊を進駐させてきた。ロシア軍のジョージアへの出兵は、オスマン帝国やイランの不満を招いた。それまでエレクレ2世の支配下に置かれていたアゼルバイジャンのハン国らは、宗主国であるカルトル・カヘティ王国への貢納を中止した。更に、北コーカサスイスラム教の諸民族軍は、宗教を保護する名目で、しばしば王国を攻撃した。エレクレ2世はロシアに対して数回にわたり条約を守ることや、軍事援助をするように催促したが、ロシアは王国の国力低下を狙っていたため[36]、エレクレ2世の催促を無視した。カルトル・カヘティ王国はロシア保護領となったが恩恵を受けられず、逆に孤立無援となった[37]。1787年、第2次露土戦争が始まり、ロシアは2大隊をジョージアから撤兵させ、1791年に露土戦争が終わってからも王国に戻さなかった[38]。エレクレ2世はやむなく、自国を守るため、オスマン帝国を含めた周辺国との交渉を開始した。露土戦争を経てもなおオスマン帝国の勢力削減をめざす「ギリシア計画」の実現は遠く、それとともに、ロシアにとってのジョージアの重要性がなくなり、「ギオルギエフスク条約」によって定められた義務が守られなくなっていたのである。

1793年、「ギオルギエフスク条約」に不満を感じたイランのアーガー・モハンマド・シャーが、ジョージアを攻撃する構えを見せた。国王エレクレ2世は、立て続けにロシアに使者を派遣し、「ギオルギエフスク条約」通り、王国への軍事援助を要求したが、ロシアは全ての要求を無視した。1795年9月、イラン軍はカルトル・カヘティ王国に侵攻し、首都トビリシを焼き払った。王国軍のみでは対処できず、ついに戦いに敗れ、国は非常に大きな被害を受け、弱体化した。

ロシアは1795年12月、イランに宣戦布告し、3万人の軍勢で攻撃を開始したが、同年、皇帝エカチェリーナ2世が死亡すると、パーヴェル1世は方針を転換し、1797年の6月、ジョージア人の要求にもかかわらず、ロシア軍は引き上げた。エカチェリーナ2世と違って、パーヴェル1世にはコーカサスに進出する意図がなかったのである。

ジョージアの歴史家の中には、ロシアは王国の併合を最終目的として、そのために王国を弱体化させることを意図していたという考えがある。この指摘は一見正しそうであるが、

[36] ვახტანგ ფერაძე, ლევან მუმლაძე、前掲、p. 97
[37] საქართველოს ისტორია მე-19 საუკუნე, არტანუჯი, თბილისი, 2004, pp. 34-35 『19世紀のジョージア史』(アルタヌジ出版社、2004年)
[38] საქართველოს ისტორია მე-19 საუკუნე、前掲、p. 35

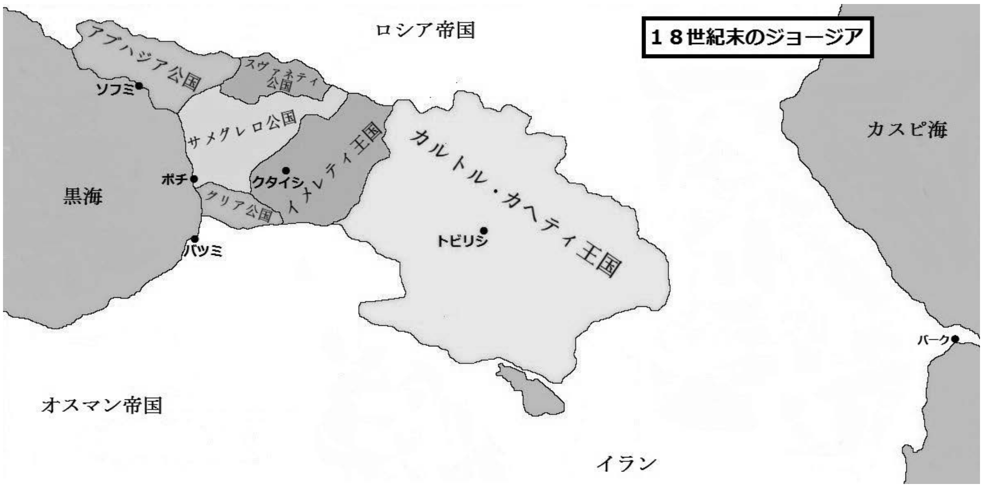
留意が必要である。エカチェリーナ 2 世がジョージアに対して関心を持ったのは、①1768～1774 年の露土戦争に際してポチ港の獲得を狙った時、②「ギリシア計画」の実行を目指した時の 2 度であった。いずれも、ロシアの目的が達せられないと分かった段階でロシアは撤兵し、ジョージアは敵国に対して孤立した。つまり、ロシアの目標はジョージアの併合、弱体化ではなく、あくまで黒海に進出することであったと考えられるのである。

IV. ジョージア併合

本章ではロシアがジョージアの諸王国を併合させる過程について検討する。中でも、ロシアの黒海進出とジョージア併合との関係に留意する。

18 世紀後半、コーカサスに対する列強の関心が高まった。イランやオスマン帝国はもちろん、英仏露も自身の勢力圏下に置くことを望んだ。このうち、いち早くコーカサスにある民族の保護を宣言したのはロシアであり、この段階ではロシアがコーカサスを勢力圏下に置く可能性が最も高かったと言える。ロシアがコーカサスに対して関心をもった理由は、アジアやインドへの進出を意図していたからである。しかし、英仏はロシアのアジアへの進出を阻止するために、イランやオスマン帝国を経済面や軍事面で支援し、コーカサスをそれぞれの勢力圏として認めることを約束した。そのような状況の中で、ジョージアの戦略的意義が高まっていった[39]。

[39] დუმბაძე მამია ,,დასავლეთ საქართველო XIX-ს პირველ ნახევარში’’ თბილისი, საქართველოს სსრ მეცნიერებათა აკადემიის გამომცემლობა, 1957, pp. 36-37 ドゥンバゼ・マミア『19 世紀前半の西ジョージア史』（ソビエトジョージア科学者出版社、1957 年）



1799 年 10 月 17 日、カルトル・カヘティ王国の状況を視察するために、ロシアからムシン・プーシキン伯爵が派遣された。1800 年、彼は皇帝に対する報告書で、カルトル・カヘティ王国を併合することにより、いずれイメレティ王国やサメグレロ公国も併合が可能となることを述べた。ヴァフタング・フェラゼ氏やラヴァン・ムムラゼ氏は、1800 年のこの報告書をもって「ロシアの全ジョージア征服計画」と判断した[40]。

1799 年の 11 月、トビリシにイヴァン・ラザレフ将軍の軍が派遣されてきた。ラザレフ将軍は、カルトル・カヘティ王国にロシア軍が出兵した理由を、「ギオルギエフスク条約」に従い、王国を保護するためだと説明した。しかし、実際の理由は併合の準備であった。更に、マミア・ドゥンバゼ氏は「ロシア軍がトビリシに入ることは、インドを巡るロシア・イギリス間の紛争の開始と関連がある」と考えている[41]。

その直前の 1798 年死亡したエレクレ 2 世の後継者は、病弱なギオルギ 12 世となっていた。1800 年、パーヴェル 1 世はフランスのナポレオンと同盟を結んだ。ロシアはフランスがイギリスと戦争する際に、フランスを支援する代わりに、ロシアがオスマン帝国の一部を獲得しようとする場合の支援をフランスから受けようとしたのである。同年インドへ出兵したロシア軍にとって、ジョージアは必要な国となった[42]。こうしてカルトル・カヘティ王国のロシアへの併合が決定され、パーヴェル 1 世は 1800 年 12 月 18 日、王国をロシアへ併合するマニフェスト（宣言書）を用意した。そのためにはギオルギ 12 世の許可が必要であったが、直前に死亡しており、ロシアへの併合の許可を得られなかった。しかし、そ

---

[40] ვახტანგ ფერაძე, ლევან მუმლაძე、前掲、p. 101
[41] დუმბაძე მამია、前掲、p. 38
[42] დუმბაძე მამია、前掲、pp. 39-40

れにも関わらずパーヴェル 1 世は、1801 年 1 月 18 日、カルトル・カヘティ王国をロシアに併合するマニフェスト（宣言書）を発表したのである。

1801 年 3 月に、パーヴェル 1 世が暗殺された。後継者のアレクサンドル 1 世は、外交政策を変更してナポレオンと対立し、ロシア軍のインドへの出兵を停止した。また、カルトル・カヘティ王国の併合が外交問題を引き起こすのを避けるために、新皇帝は王国のロシアへの併合を保留した。そしてカール・クノリング将軍に対して、王国の状態を検討するため、①王国はロシアの援助なしに自国を守ることができるか、②ロシアへの併合はすべてのジョージア人の意思であったのかの 2 点を調べるよう命じた[43]。

クノリングは命令の目的を理解し、その後皇帝に提出した報告書の中で、カルトル・カヘティ王国は独力では自国を守ることができず、市民はロシアへの併合を望んでいるという虚偽の内容を記載した。実際には、ジョージア人はロシアへの併合を望んでおらず、報告書の内容はカルトル・カヘティ王国を併合するための仕掛けであった。1801 年 8 月 8 日、ロシアでカルトル・カヘティ王国をロシアへ併合すること、そしてロシアのグベールニヤ（県）になることが決定された。1801 年 9 月 12 日、アレクサンドル 1 世は王国をロシアへ併合するマニフェスト（宣言書）を発表した[44]。

ドド・チュンブリゼ氏は一連の出来事について、「アレクサンドル 1 世は、併合マニフェストによってギオルギエフスク条約を破り、王族が国王の座に就くことを否定した。そのようなことは、オスマン帝国やイランもしたことがなかった。もちろん、両国が征服する際には国王の権限が縮小されるが、宗主国の支配下に運営されていた。ロシアだけが王政を廃止し、王族をロシアに移住させたのである」と批判した[45]。

カルトル・カヘティ王国の併合の目的は何であろうか。ドゥンバゼ氏によると、19 世紀初頭にロシアはバーク（カスピ海西沿岸）と西ジョージアの黒海沿岸を手に入れる計画を立てた。トビリシを経て黒海とカスピ海とを直結し、ロシアの支配下に新貿易ルートを開こうというのである[46]。しかし、ではなぜカスピ海と黒海とを直結する必要があるのか。ドゥンバゼ氏は書いていないが、彼の議論を踏まえると、ロシアはカルトル・カヘティ王国（後にジョージア）を併合し、黒海とカスピ海を直結してアジア市場などとの貿易ルートの支配しようとしていたと考えられる。そこで、カルトル・カヘティ王国に次いで、ロシアは西ジョージアの併合に向かった。そこを併合せずに、黒海沿岸を利用することはで

[43]საქართველოს ისტორია მე-19 საუკუნე、前掲、p. 45
[44]საქართველოს ისტორია მე-19 საუკუნე、前掲、p. 46
[45]დოდო ჭუმბურიძე, ვაჟა კიკნაძე, ხათუნა ქოქრაშვილი, ლელა სარალიძე、前掲、p. 5
[46]დუმბაძე მამია、前掲、p. 165

きなかったのである。ロシアはカルトル・カヘティ王国併合の理由として、王国の状態を調査させたが、西ジョージアの場合はそのような調査なしに併合がはかられた。

イメレティ王国の国王ソロモン 2 世は、反ロシア的思想の持ち主であったので、ロシアが直接交渉に乗り出すことは難しかった。そこで彼に対しては、サメグレロ公国のグリゴリ・ダディアニ公爵が利用されることになった。ソロモン 2 世とダディアニはレチュフミ地方を巡って争っており、ダディアニはロシアの誘いに乗った。ロシアはダディアニに対し、サメグレロ公国をロシアに併合すれば、レチュフミ地方の獲得を支持するとの条件を提示し、ダディアニはそれを承諾した。ロシアから派遣されていたパーヴェル・ツィツィアノフジョージア総督は、ダディアニにアレクサンドル 1 世に対する請願書（ロシアへの併合を願い出る内容）を送らせるため、マイノフ大佐を派遣した。これは実に茶番であった。請願書の内容はロシア人が書いたものであったが、ダディアニは、ほとんど修正せずに自分の書いた請願書として提出したのである。後には、アブハジア公爵やグリア公爵やイメレティ国王も、同じようにして書かれた請願書を提出した。1803 年 12 月 4 日、サメグレロ公国は請願書に調印し、正式にロシアの保護領となった[47]。請願書には、①サメグレロ公国は永久にロシアの一部となること、②ロシアは造船のために公国の森から材木を無料で得ること、③新港を開設する場合ロシア商人は課税されないことが書かれていた[48]。ここから、この請願書はロシアにとって非常に有利なものであることがわかるであろう。つまり、サメグレロ公国のロシア保護領化は、実際にはロシアによる併合であった。

こうしてサメグレロ公国はロシアの一部となったが、海港都市ポチはまだオスマン帝国の支配下に残った。黒海沿岸にあったこの要塞は、ロシアの目標であった。ツィツィアノフ総督は皇帝に送った手紙に「サメグレロはポチ無しでは意味がありません」と書いている。当時、ロシアはオスマン帝国との戦いを準備していたが、ポチの獲得は非常に重要な課題なので、政府はツィツィアノフ総督に対して機会があれば必ず港を「征服」するよう命令した[49]。このことからも、ロシアの第一目標が黒海沿岸であったことは明らかである。先に、サメグレロの黒海沿岸を獲得するに当たって、ロシアはサメグレロ公爵に同国を支持することを提案したが、その時結ばれた協定にも、ロシアが黒海の利益を確保すること

---

[47]მერაბ ვაჩნაძე, ვახტანგ გურული ,,საქართველო-რუსეთის ურთიერთობა (1801-1921), გამომცემლობა უნივერსალი, თბილისი, 2009, p. 17 ヴァチュナゼ・メラブ、グルリ・ヴァフタング『ジョージア・ロシア関係（1801 年～1921 年)』(ウニヴェルサリ出版社、2009 年)

[48]მერაბ ვაჩნაძე, ვახტანგ გურული ,,საქართველო-რუსეთის ურთიერთობა (1801-1921)、前掲、pp. 18-19

[49]მერაბ ვაჩნაძე, ვახტანგ გურული ,,საქართველო-რუსეთის ურთიერთობა (1801-1921)、前掲、p. 86

が記載された。ロシアは造船のためにサメグレロの森の材木を使い、また新しい港町を建てる計画も立てられた。ツィツィアノフの手紙によってポチの重要性を理解したロシアは、オスマン帝国と和平条約を結んだにも拘らず、ポチ征服の許可を出した。

1804 年に、ツィツィアノフ総督はロシア軍と共にイメレティ王国に進出し、ソロモン 2 世に対して、ロシアによる保護を希望しない場合は戦争を起こすと脅迫した。言われるがままに、ソロモン 2 世はロシア皇帝に請願書を提出し、1804 年 4 月 25 日、エルアズナウリ協定が結ばれて、イメレティ王国もロシアの保護領となった。請願書の内容はサメグレロの請願書と同様のものである。ここでも、ロシアは造船のために公国の森から素材を無料で手に入れること（第 11 条)、黒海の港から東ジョージアに、また逆に東ジョージアから黒海に貨物を運ぶ際、イメレティ王国はロシア人に課税しないこと（第 16 条）が明記された[50]。実は同協定は結ばれる 2 年前の 1802 年 4 月末、ツィツィアノフ総督は交渉のため、イメレティ王国に使者を派遣した。使者派遣の目的の 1 つは、ソロモン 2 世が毎年ロシアに造船のため 5000 本の材木を無料で提供、あるいは安価で譲渡することに同意するか否かを調査することにあった[51]。イメレティ王国の場合にも、ロシアが黒海に関心を持っていたことは明らかであろう。

グリア公国（イメレティ王国の一部）の黒海沿岸はオスマン帝国に併合されており、港の要塞はオスマン帝国軍の支配下に置かれていた。ロシアはグリア公国の黒海沿岸も狙い、1804 年 2 月 13 日、ツィツィアノフ総督は在オスマン帝国大使のイタリンスキーに手紙を送り、ロシアにグリア公国のバツミ港を譲るための交渉をオスマン帝国政府と行うことを要求した。さらに同年の 4 月 25 日、総督は再び手紙を送り、グリア公国はロシアの一部となったので、バツミ港をロシアに必ず譲ることを求めたが、これは実現しなかった[52]。

1806 年、露土戦争が始まると、アブハジア公国は、オスマン帝国の支配から独立するため、ロシアに支援を要請した。ロシアはこれを支持する代わりに、ポチ獲得のためアブハジア公国の支援を要求した。アブハジア公国のケレシュ・ベイ・シャルヴァシゼ公爵は、オスマン帝国に対して戦うことはできなかったが、その代わりに露土戦争の際、オスマン

[50] მერაბ ვაჩნაძე, ვახტანგ გურული ,,საქართველო-რუსეთის ურთიერთობა (1801-1921)、前掲、pp. 21-23

[51] მანანა ხომერიკი ,,იმერეთის სამეფოს გაუქმება, 1819-1829 წლების აჯანყება და იმერეთის ბაგრატიონები’’, უნივერსალი, თბილისი, 2012, pp. 34-35 マナナ・ホメリキ『イメレティ王国の廃止：1819 年～1829 年の反乱とイメレティのバグラチオニ』(ユニヴェルサリ出版社、2012 年)

[52] ქველი ჩხატარაიშვილი ,,გურიის სამთავროს შეერთება რუსეთთან ‘’ მეცნიერება, თბილისი, 1985, p. 21 チュハタライシュヴィリ・クヴェリ『グリア公国のロシアへの併合』(メツニエレバ出版社、1985 年)

帝国軍がアブハジア公国のロシアを攻撃することを妨げた。このため、公爵はオスマン帝国に殺され、新公爵は親オスマン帝国派のアスラン・シャルヴァシゼとなった。新公爵に対して彼の兄弟のサファル・ベグ・シャルヴァシゼが反乱を図ったが、失敗した。その後、サファル・ベグはロシアに支援を求めた。1808年8月12日、サファル・ベグは正教に改宗し、名前をギオルギに改め、ロシア皇帝への請願書に調印した。請願書の第7条には、ロシアが造船のために材木を無料で手に入れることができると記されていた。1810年2月17日、アレクサンドル1世はアブハジア公国の請願を受け入れ、同公国は正式にロシア保護領となった。同年の7月10日、ロシア軍はソフミ港町に進出し、ギオルギ・シャルヴァシゼは公爵となった[53]。その結果、ロシアはアブハジア公国の黒海沿岸も獲得することができた。

ソロモン2世は「エルアズナウリ協定」に調印したが、国の運営は依然としてソロモン2世の手にあった。国王はロシアの併合から解放されることを望んだが、ロシアはそうしたソロモン2世の独立政策に不満で、王国の廃止が決定された。1809年、アレクサンドル・トルマソーフコーカサス総督はイメレティ王国を訪問し、交渉のため招いたソロモン2世を騙して逮捕した。1810年、総督はイメレティ王国を廃止し、ロシアへの併合を宣言した。逮捕されたソロモン2世は逃亡し、イメレティ王国に帰って反乱を起こしたが、激しい戦闘の末ロシア軍に敗北し、さらにオスマン帝国に逃げ込んだ（1815年にオスマン帝国で死亡）。グルリ氏は、ロシアがソロモン2世の権利を侵害し、「エルアズナウリ協定」を破ってイメレティ王国を併合したことを批判している[54]。

1810年、グリア公国の公爵は、ロシアの要求通りイメレティ王国から独立し、ロシアに保護を請願した。もちろん請願書は受け入れられ、グリアは自治公国としてロシアの一部となったが、実際には自治権が大きく制限された。協定により、ロシアはグリア公国の黒海沿岸に新港を開設する権利や造船のため材木を無料で利用する権利を得た[55]。1811年、ロシア軍はオスマン帝国に占領されていたグリアの港町を攻撃する準備を進めた。9月8日、シモニノヴィッチ大佐はトルマソーフ総督に「バツミ要塞やツィヒスジリ要塞（バツミと近い）を征服するかもしれない」と報告し、総督から攻撃の許可を得た。しかし、オ

[53]მერაბ ვაჩნაძე, ვახტან გურული ,,საქართველო-რუსეთის ურთიერთობა（1801-1921）、前掲、pp. 28-31
[54]მერაბ ვაჩნაძე, ვახტან გურული ,,საქართველო-რუსეთის ურთიერთობა（1801-1921）、前掲、p. 24
[55]ქველი ჩხატარაიშვილი、前掲、pp. 37-38

スマン帝国とロシアが平和条約を結んだため、最終的に攻撃は実施されなかった[56]。

以上の内容から、これまでの研究では漠然と指摘はされていたものの、ロシアの目的はキリスト教徒を保護することにあったのではなく、黒海へ進出することであったことがほぼ明らかになった。目的を達成するため、最初にカルトル・カヘティ王国を廃止して併合した。翌年、西ジョージアの公国や王国の併合に向かい、1810 年にはスヴァネティ公国（イメレティの北部、コーカサス山脈の元にある公国）を除いて西ジョージアの併合を完了した。スヴァネティ公国が併合されなかったのは、黒海から遠かったためである（1859 年スヴァネティ公国も併合された）。

V.　おわりに

本稿から明らかになったように、ロシアにキリスト教徒を保護する意図がなかった。15 世紀からヨーロッパから切り離され、孤立状態となったジョージアは、イスラム教の敵国に囲まれた。15 世紀から、ジョージアの国王らはそうした国々と戦うためロシアに支援を要請したが、支援したのはイヴァン 4 世だけであり、それもクリミア・ハン国の攻撃でカヘティ王国から撤兵した。18 世紀、ピョートル 1 世やエカチェリーナ 2 世は、キリスト教徒の保護の名目でジョージアにイランやオスマン帝国に対する同盟を提案した。しかし、ピョートル 1 世は秘かにオスマンと平和条約を結んだ。その条約に、カルトルを保護するという条文はなかった。次いで 1768、年エカチェリーナ 2 世は露土戦争の際、エレクレ 2 世やソロモン 1 世に対オスマン同盟への加入を提案した。これに応じてジョージア人は参戦したが、ロシア軍はポチの占領に失敗すると撤兵した。両皇帝に約束を守らず支援せずに残ったジョージア人はオスマン帝国から攻撃を受け、敗北し、国力は著しく低下した。その後、「ギリシア計画」実行のために、再びジョージアはロシアにとって重要となったが、計画失敗と共にロシアの支援はなくなり、ジョージアは孤立した。

この頃のロシアのジョージアへの進出は黒海進出、特にカスピ海と黒海とを直結してアジアとの貿易を円滑にしようとするためのものであり、両海の間にはさまれたジョージアがその犠牲となった。ジョージアの国王らはロシアへ数回にわたり協力を求めたが、ロシアからほとんど支持を得られなかった。ジョージアに軍を派遣したのは、海岸へ進出する時だけであった。全ての西ジョージア公の国や王国の請願書に、ロシアの黒海への関心が

---

[56]ქველი ჩხატარაიშვილი、前掲、p. 42

反映され、ロシアにとってジョージアは、黒海へ進出するための橋頭保であり、ジョージアを保護する考えは皆無であった。それゆえジョージアが海から遠く離れていればロシアへの併合を避けられたかもしれない。なぜなら、海から遠いスヴァネティ公国の併合は、非常に遅れて行われるからである。

以上、ロシアによるジョージア併合について、先行研究を踏まえてその論点や問題点を整理し、現段階での見通しを示した。これまでの研究では部分的にしか触れられてこなかったロシアの併合目的が、黒海進出、すなわち海港都市の占領にあったことが確認できたが、その具体像はまだ検討途上である。この点は今後の課題としたい。